

静岡産業大学 情報学部 研究紀要
Journal of Shizuoka Sangyo University
第24号 (2022) 別刷

「父」からの逃避
— 『人間失格』の計量テキスト分析—

Escaping from ‘father’
—A Quantitative Textual Analysis of “No Longer Human” —

小谷内郁宏

Ikuhiro KOYAUCHI

静岡産業大学 情報学部

「父」からの逃避
—『人間失格』の計量テキスト分析—
Escaping from ‘Father’
—A Quantitative Textual Analysis of “No Longer Human”—

小谷内郁宏
Ikuhiro KOYAUCHI

(令和3年10月5日受理)

Keywords : 太宰治 人間失格 計量テキスト分析 データマイニング

太宰治の遺作とも言える『人間失格』(1948年)のテーマについては、さまざまな解釈がなされている。CiNii(学術情報データベース)サイトで、「人間失格」をキーワードに論文検索すると、この作品については「人間の営みへの違和感」、「生きることの困難」、「自己愛」、「道化であること」「宗教との相克」といったテーマ設定の論文が見受けられる。

筆者は、この小説の最終部分の章句よりテーマを「父から逃避」と仮定し、社会科学分野の計量テキスト分析、特にアンケート分析などでよく使用される分析ソフト KH Coder を用いテキスト分析をし、そのデータから仮定したテーマの妥当性を確認したい。

はじめに

『人間失格』の中でテーマを予感させる有名な章句を挙げるならば、第一の手記では冒頭にある「恥の多い生涯を送って来ました。」、そして同じく第一の手記で「自分は隣人と、ほとんど会話ができません。何を、どう言ったらいいのか、わからないのです。そこで考え出したのは、道化でした。」がある。ストーリーの終盤、第三の手記二の中には「いまに、ここから出ても、自分はやっぱり狂人、いや、癡人という刻印を額に打たれる事でしょう。人間、失格。もはや、自分は、完全に、人間で無くなりました。」はそのままタイトルとなった部分である。そして、最終章「あとがき」で締め言葉として、「「あの一のお父さんが悪いのですよ」何気なさそうに、そう言った。「私たちの知っている葉ちゃんは、とても素直で、よく気がきいて、あれでお酒さえ飲まなければ、いいえ、飲んでも、………神様みたいないい子でした。」とあり、この章句をもって小説は完結する。(以上、下線部は全て筆者による。)

最後の「あの一のお父さんが悪いのですよ」という部分は、筆者を含めて多くの読者にとって読書中にはさほど感じられない主人公の人間性の失格要因であり、およそ想定外の要因に感じられる。

すなわち、この小説では「お父さん」は「第一の手記」以外では場面登場はしない。「第一の手記」は、主人公の小学生時代までの部分で、父との仮面的な親子関係が描かれている。葉蔵が家を離れる中校生時代以降の他の章では、直に主人公と父親の交流する場面がないのである。登場するのは、父親の見張り役としてのヒラメと長兄だけであり、父親の

この小説の存在感は薄いように感じられる。⁽¹⁾

タイトル「人間失格」は意味深長である。如何なる原因、理由があつて、葉蔵は自らの人間性を失格させていくのかということが、この小説のテーマの真髄と言える。

当初、筆者も「お父さん」の登場場面の少なさから、他のテーマの可能性を模索していたが読む込むうちに、この作品を主人公の自堕落な女性関係からの人生転落の物語としてではなく、主人公が抑圧的な「父」から逃れるため負の方向に行動せざるを得ないストーリーとして位置づけたいと考えるようになった。

1 太宰治について

彼の生年は1909年（明治42年）6月19日、作家デビューは大学生時代、24歳時の1933年（昭和8年）、東奥日報に発表したペンネーム「太宰治」を初めて用いた小説の『列車』とされる。

そして最後の作品は1948年（昭和23年）朝日新聞に発表した『グッド・バイ』である。作家としての活動期間は16年間である。没年は1948年（昭和23年）6月13日、38歳で愛人の山崎富栄とともに玉川上水にて入水自殺を遂げた。

本名は津島修治（つしま・しゅうじ）である。大学時代は左翼活動で挫折した後、自殺未遂や薬物中毒を繰り返しながらも、第二次世界大戦前から戦後にかけて作品を次々に発表し人気作家となり、16年間の活動で短編から長編まで合わせると約300作品を書き上げた。

主な作品に『走れメロス』『津軽』『お伽草紙』『人間失格』などがあり、特に没落した華族の女性を主人公にした『斜陽』は当時大ベストセラーとなった。

その作風から坂口安吾、織田作之助、石川淳、壇一雄らとともに新戯作派または無頼派と呼ばれ、典型的な自己破滅型作家であった。

彼の命日は「桜桃忌」というが、それは晩年の短編小説「桜桃」の名にちなんで命名された。現在でも毎年、東京都三鷹市の禅林寺にて、遺体の見つかった6月19日に桜桃忌が挙行され、多くの読者たちが訪れ、故人を偲んでいる。

2 『人間失格』について

この作品は終戦後の1948年、雑誌「展望」6月号から8月号に3回にわたって掲載された。著者死亡の翌月の7月25日、筑摩書房より最後の作品である短編『グッド・バイ』と併せて刊行された。ただし、「グッド・バイ」は未刊の作品であり、その前作『人間失格』が実質上の遺作とされている。

今日でも発行部数は多く、新潮文庫版だけでも累計発行部数約700万部であり、夏目漱石『こころ』とこれまで累計部数を争ってきたとのことである。

なぜこれまで『人間失格』が多く読み継がれてきたかと言えば、筆者は作品読解における多面性、現代性にあると考えている。例えば、最近の新しい読みとして、主人公の行動に人格性障害のモデルを見る心理学的アプローチもあるという。

この作品は、読む年代、時代によって違った意味合いを生み、そして時代を超えて共感を生む作品である。筆者に関して言えば、学生時代にこの作品を読んだ際、主人公が破綻していく過程で、その語りに没入はするが、嫌悪感も沸き上がった。しかしながら、その後再読した際には、意外にも主人公の自己モラルに誠実に生きる姿への共感と納得の念を

抱いたのである。

2.1 登場人物

『人間失格』において、主人公大庭葉蔵は幼少の頃より、美男子で調子者、他者に対し道化を演じていくが、その交流の中で、多くのトラブルを起こしていく。彼は東北地方の金満家の息子であり、交際女性の出版社への紹介もあって、運良く流行漫画家になっていくが、女性、酒や薬に溺れ、破滅へ向かっていくという展開である。太宰治は、自身の生き様を小説に反映させる私小説作家と自らを称していないが、葉蔵というキャラクターは、弘前市の名家出身で流行漫画家となるが、自身も名家出身で流行作家であった太宰自身が多分に投影されている。

以下に、葉蔵の転落に影響を与えたと思われる登場人物を縦方向に5つの章立てに分け、横方向では「語り手」「男性の登場人物」「女性の登場人物」「出来事」とし、まとめる。

章	語り手	男性（登場人物）	女性（登場人物）	出来事
はしがき	私（作家）			三葉の写真（葉蔵）
第一の手記	自分（葉蔵）	・父	母	道化性発露
第二の手記	自分（葉蔵）	・竹一（中学生） ・堀木正雄（画学生） ・長兄（見張り役）	・アナサ（下宿屋姉） ・セツちゃん（下宿屋妹） ・ツネ子（カフェ 死亡） ・女子高等師範（運動同志）	ツネ子と 入水自殺
第三の手記一 第三の手記二	自分（葉蔵）	・堀木正雄 ・ヒラメ（渋谷 見張り役）	・シヅ子（雑誌記者） ーシゲ子（シヅ子娘5歳） ・マダム ・ヨシ子（タバコ屋内縁妻） ・薬屋の奥さん（薬物手渡す）	・ヨシ子への暴行 目撃 ・薬物自殺未遂 ・精神病院入院
あとがき	私（作家）		・マダム（写真とノートを 「私」に手渡す）	写真、ノートで 冒頭部分とつながる

まずは「私」である。作家を生業としていることが予想される。始めの章で、「私」が葉蔵の三枚の写真を見るところから始まる。その三枚は葉蔵の「幼少期」「青年期」「精神病院入院時」のものである。

「あとがき」で、小説の素材としてマダムより葉蔵の手記と写真を受け取った成り行きが語られ、「はしがき」と円環的に繋がる。「あとがき」で現れる「マダム」は、「第三の手記」で登場する「マダム」と同一人物である。精神病院にいる葉蔵からマダム宛に、三枚の写真とノートが送りつけられたのである。

次に「第一の手記」に登場する「父親」である。東北地方の名家の当主で国会議員、上野桜木町に別荘があり、東京と東北を行き来する。「第一の手記」で、主人公との幼少期の思い出が語られるが、それ以降の章で主人公との交流の場面登場はない。葉蔵に精神面でも、経済面でも多大なる影響を与え続ける。

そして「ヒラメ（渋谷）」である。書画骨董店を営み、葉蔵の父親の太鼓持ち的な人物であり、葉蔵の身元保証人を頼まれる。名は眼つきが魚のヒラメに似ていることから、そう呼ばれる。彼の存在意義は「父」の間接的影響力を行使する人物としてある。

男性の友人としては、二人挙げられている。中学時代級友の「竹一」であり、貧弱な体格で勉強もできないが、葉蔵の内に潜む「道化」を見抜き、主人公を慌てさせる。

次に「堀木正雄」である。東京で出会った遊び仲間。葉蔵に酒や煙草を教え込んだ悪友であり、主人公の「父」に負けず劣らず、田舎育ちの彼に多大な影響を終始与え続けることになる。

この小説を特徴づけているのは、主人公と複数の女性との交流である。ここでは、主に主人公と関連する五人を挙げる。

まずは「ツネ子」である。カフェで出会った女給である。もともと広島からやってきた二歳年上の女性であり、夫は刑務所に入っている。後に葉蔵は彼女と入水心中を試み、彼女だけ絶命する。

次に、「シズ子」である。甲州出身の男まさりの雑誌記者であり、五歳の娘「シゲ子」とともに葉蔵と同棲生活を送ることになる。夫とは死別の身である。彼女は葉蔵に漫画家への道のりを与えた存在である。

三人目は「ヨシ子」である。タバコ屋の看板娘であり、性格は純粹無垢であった。後に葉蔵の内縁の妻となるが、出入りしていた商人に暴行される場面を葉蔵に目撃され、それ以後彼はそのことで精神的に苦しむことになる。

四人目は「葉屋の奥さん」である。幼少期に小児麻痺に罹り、身障者となる。未亡人で葉蔵と関係を結び、せがまれて違法に薬物を手渡し続けることになる。

最後に、「マダム」であり、バーの女主人で葉蔵を気に入りに、面倒をみた。最終章で、語り手である「私」に葉蔵の手記と写真を手渡した人物である。

ここで留意したい点は、「第一の手記」のみ現れる「母」の存在感が極めて薄いということである。小説中での母親は、父子関係を見守る傍観者でしかない。

まとめると、主人公へ影響力の大きい男性は「父親」「竹一」「堀木」「ヒラタ」の四人である。葉蔵と面識はないが、「はしがき」「あとがき」の語り手として、「私」は作中の主人公に間接的に影響を与えている。そして影響力の大きい女性は「ツネ子」「シズ子」「ヨシ子」「くすり屋の奥さん」「マダム」の五人である。「葉蔵」とこの十人との関連性を、以下に計量テキスト分析の方法を用い考えていきたい。

2.2 プロット

主人公葉蔵とは別人である「私」による序章の「はしがき」で始まり、以下葉蔵の視点による「第一の手記」「第二の手記」「第三の手記一」「第三の手記二」の四章があり、そして再登場する「私」の視点による「はしがき」「あとがき」があり、計6章で構成されている。

「はしがき」

「私」が葉蔵の写真を見た感想を述べる。1枚目の写真は10歳前後、顔は笑っているが薄気味悪い雰囲気をもった「猿の笑顔」だと評する。

2枚目は学生時代のもので、整った顔立ちで笑顔を浮かべているが、「生きている人間の感じがしない」という印象を語る。

3枚目は白髪になり年がわからない。表情はなく、印象には残らない顔をしている。そ

して「見るものをぞっとさせる」と「私」は感じる。

「第一の手記」

「恥の多い生涯を送っていきました」で始まる第一の手記には、葉蔵の少年時代のことがつづられている。

葉蔵は人間の営み、幸福というものが実感をもって理解できない。他人を恐れつつも、葉蔵はいつも周囲を笑わせる「お道化」になることを選ぶ。

しかし、周囲を上手くだます術を身につけても、互いに欺き合っても明るく生きることができない人間が理解できない。

自分の親の心すら分からない葉蔵は、女中や下男に暴行を受けたりもし、他人を信用できずに笑って誤魔化すばかりの幼少期を送った。

「第二の手記」

中学時代そして東京への進学後、破滅に近づいていく様子を描く。

年月を重ね、完璧な演技を身につけた葉蔵だったが、ある時同級生の竹一からその演技を見抜かれてしまう。動揺した葉蔵は竹一に接近し、どうにかその失敗を誤魔化すことに成功した。

父の勧めで東京の高校に進学した葉蔵は、画塾で堀木という男に出会い、一緒に出歩くようになった。堀木から酒、タバコ、女性といった遊びを教えられ、真剣味はないにもかかわらず、左翼活動の雰囲気しに心安らぐのを感じ、のめり込んでいく。

学校にも行かず遊びまわらる中で、カフェで出会ったツネ子と心中を試みたが、自分ひとり生き残ってしまう。

「第三の手記」(一と二に分かれる。二では主にヨシ子の暴行事件と葉蔵の自殺未遂について語られる。)

複雑な女性関係を重ねながら、薬物に手を出し始め廃人に近づく様子が描かれる。

ツネ子との心中に失敗した葉蔵はヒラメの家に引き取られる。そこでの生活は窮屈なものだったため逃げ出し、知り合った女性のもとに転がり込む。しかし、幸福であることを恐れるあまり、また逃げ出す。

その後知り合ったタバコ屋の娘を内縁の妻にするが、家で商人に彼女が暴行を受ける場面を目撃する。不幸続きに耐え切れず、酒に溺れ、葉にも手を出してしまう。

精神病院に強制入院させられたことで、自分は「人間失格」だと感じる。兄たちの手引きで故郷に帰り、静養をする中、幸福も不幸もなく一切が過ぎていく感覚を味わい、手記は閉じられる。

「あとがき」

「私」がバーのマダムと会い、葉蔵の手記を受けとった時の様子が回想される。

「私」は手記を読みふけり、そのまま出版社へと持ち込むことを決める。マダムは葉蔵のことについて話をするが、意外にも彼女は「神様みたいないい子」と葉蔵を評して物語は閉じられる。

3. 計量テキスト分析

以下に、KH Coder 計量分析による章ごとにまとめたテキスト語数表を挙げる。

この表での「総抽出語数（使用）」とは、分析対象テキストから抽出された「語」の数で、（使用）というのは分析に使用する「語」の数である。語数と（使用）数に差があるのは「助詞」「助動詞」などの機能語品詞を分析対象としないからで、その取捨選択はソフトウェア KH Coder が自動的に判断している。

	はしがき	第一の手記	第二の手記	第三の手記 1	第三の手記 2	あとがき	全 体
総抽出語数 (使用)	1207 (429)	5689 (1984)	17329 (6104)	11165 (3859)	9958 (3567)	1307 (416)	46655 (16359)
異なり語数 (使用)	328 (230)	1189 (894)	2671 (2300)	2039 (1707)	1810 (1516)	401 (275)	* 4999 (4442)
文	52	148	466	460	426	48	1600
段 落	11	51	227	270	225	27	811

上記表の縦軸見出し2段目の「異なり語数（使用）」とは総抽出語数に対し異なる語彙の数であり、すなわち異なり語数では「葉蔵」という語彙が何度出てきてもそれは1語とカウントされ、計算では、（使用）語数が用いられる。「文」とは、句点「。」で区切られた文がいくつあるかということである。

「段落」は、ファイル内の改行マークごとの部分を段落として数える。

今回の手順では、基本テキストとして青空文庫より『人間失格』のテキストファイルをダウンロードし使用した。

The screenshot shows the KH Coder interface for the project 'dazai dai1.txt'. The 'Database Stats' section displays the following data:

集計単位		ケース数
文		148
段落		51

Other statistics shown in the interface include: 総抽出語数 (使用) : 5,689 (1,984) and 異なり語数 (使用) : 1,118 (894). The interface language is set to Japanese.

図1 第一の手記 計量値

3.1 クレンジング

前処理の第一段階として、ファイルの前処理が必要となる。青空文庫からテキストファイルを落とし込む場合、漢字のルビも本文に入るので、それらを一つひとつ除去しなければならない。概して明治期漢字を多用する作家であればあるほどルビが多く、この作業が余計に必要となる。太宰治の場合、森鷗外や夏目漱石ほどでもないが、現在では使用されない難読の漢語使用が多々見受けられ、ルビ削除にそれなりの労力を要した。

前処理を終えた後、各章ごとに KH coder で文字数を計量し、最後に各章のファイルを合体し、全体の語数を計量した。ただし、各章ごとの総抽出語数、文数、段落数と全体の

合算数が一致するのに対し、上記の表の*印の全体の異なり語数は6章合算することで、各章ごとの重なり語数の合算数よりも大きく減少した。

ちなみに、全体で「異なり語数（使用）／総抽出語数（使用）」 $4442/16359 \approx 0.27$ （27%）という数値が書き手の語彙率となり、語彙力の豊富さのひとつの指標ともなりうる。各章のボリュームを総抽出語数から算出すると、「はしがき」2.6%、「第一の手記」12.2%、「第二の手記」37.1%、「第三の手記一」23.9%、「第三の手記二」21.3%、「あとがき」2.8%となっており、「私」と「マダム」しか登場しない「はしがき」と「あとがき」は合わせて5.4%、残り95%は第一から第三までの手記に当たる。

幼少期の「第一の手記」12%、高校生（旧制）時代の「第二の手記」37%で、合わせて約50%を占めており、20歳前後までの人格形成の重要性を示している。精神的に影響の大きい人物としては、「父」「竹一」「堀木正雄」の男性三人、女性では心中したツネ子のみであろう。

女性との多彩な交流でストーリー的には活発な「第三の手記」では一部と二部を合わせて45%でやはり比重は大きい。「第三の手記」において、男性の登場場面で圧倒的なのは「堀木正雄」で、女性はシズ子、マダム、ヨシ子、薬屋の奥さんの4人が考えられるが、以降計量テキスト分析の使用しながら検証していきたい。

3.2 コーディング

テキスト解析をする際、コーディング作業が必要となる。例えば、文中の人名で「ヨシ子」と「ヨっちゃん」は同一人物、「ヒラメ」と「洪田」も同一人物である。予備作業として両単語を関連づけることで、解析作業の精度が上がる。本論考の場合も、人名を中心にその作業を行った。

右記例のように、テキスト上でその人物に関連する単語がある場合、or で繋ぎ、そしてできあがった一覧表をテキストファイル化し、KH Coder に読み込ませる作業が必要となる。

Line	Code
1	*葉蔵
2	葉ちゃん or 自分 or 美貌 or 死相 or 道化 or お道化
3	
4	*自分
5	日陰者 or 敗者 or 悪徳者 or 道化 or 女達者 or 日
6	
7	*父
8	本郷 or 森川町 or 仙遊館 or 議員 or 自分 or 桜
9	
10	*長兄
11	父の代理
12	
13	*ヒラメ
14	大久保 or 骨董商 or 洪田
15	
16	*竹一
17	白痴 or 聖徳太子 or ワザ or 耳だれ or 青ぶくれ or
18	
19	*堀木
20	正雄 or 悪友 or 浅草 or チャッカリ性 or イゴイズム or
21	
22	*ツネ子
23	女給 or 大カワI or 銀座 or 関西 or 本所 or 広島
24	
25	*シズ子

図2 コーディングリスト

3.3 特徴語

次に、『人間失格』の構成を調べるために、「はしがき」から始まる6つの章において、特に多く出現している言葉、すなわちそれぞれの章を特徴づけている単語を上位10ずつリストアップする。「ツール」→「外部変数と見出し」の項を選択することでリストアップした。

下記の表の数値はそれぞれの語と6つの章との関連をあらわすJaccardの類似性測度をもって、値が大きい順に10語が選択されている。

末吉（文献2，p.214）によると、Jaccard係数はKH Coderに主たる分析手法として採用されている。それは、「ある語A」と「ある語B」の関連性（類似性・共起性）の程度を表

わす係数で、数式で示すと（Jaccard 係数＝「A」と「B」の両方が同時に出現した回数／「A」と「B」のどちらか片方だけでも出現した回数）であり、0 から 1 の値を取り、その値を比較することで共起性や類似性の大きさを相対的に比較できるひとつの指標となる。⁽²⁾

目安として、「0.1」以上で「関連がある」、「0.2」以上で「強い関連がある」そして「0.3」以上で「とても強い関連がある」とされる。

それゆえ、これらの語は単なる頻出語ではなく、各章をそれぞれに特徴付けている語と言える。

		あとがき		はしがき		第一の手記	
		私	.197	写真	.207	自分	.153
		友人	.143	笑顔	.094	人間	.148
		ノート	.104	見る	.093	父	.095
		書く	.091	顔	.089	言う	.081
		マダム	.088	表情	.086	思う	.074
		知る	.077	私	.085	人	.064
		手記	.076	足りる	.074	道化	.057
		京橋	.073	子供	.073	子供	.056
		リュックサック	.063	学生	.071	見る	.054
		船橋	.063	不思議	.070	聞く	.050
第三の手記1		第三の手記2		第二の手記			
堀木	.063	ヨシ子	.054	自分	.273		
ヒラメ	.046	罪	.051	女	.081		
飲む	.043	堀木	.050	言う	.074		
世間	.039	奥さん	.040	無い	.068		
出る	.038	アント	.038	竹一	.053		
酒	.037	薬	.033	思う	.050		
気持	.031	信頼	.026	堀木	.048		
人	.030	注射	.026	出る	.046		
家	.029	ヒラメ	.024	道化	.046		
シゲ子	.028	焼酎	.024	顔	.045		

図3 各章における10の特徴語

まず「はしがき」では、圧倒的な高い係数の高い語は「写真」0.20（強い関連）である。写真は三枚、全て葉蔵を写したものであり、語られる内容も葉蔵のみと言える。

次に、幼少期を描いた「第一の手記」では「自分」(0.15)「人間」(0.15)「父」(0.1)である。「自分」以外では「父」が特徴的である。

「第二の手記」では、「自分」(0.27)、主人公以外では「竹一」「堀木」(合わせて0.1)で、自分と男友達2名が高校時代の主人公に大きな影響を与えている。

そして「第三の手記一」と「第三の手記二」は合わせて、「堀木」(0.11)「ヒラメ」(0.07)、精神病院入院のきっかけを作った「ヨシ子」「薬屋の奥さん」(合わせて0.1)が特徴的である。

そして「あとがき」では、語り手の「私」(0.2)、そして「私」が船橋市の「友人」(0.14)を訪ねた際、偶然マダム(0.1)のバアに立ち寄り、葉蔵の写真、ノートを手に入れた。そ

の一連の人物、事物が特徴語になっている。

総括すると、「自分」「父」「竹一」「堀木」「ヒラメ」「友人」の男性に関する語の合わせた重み(5.4)が、「ヨシコ」「奥さん」「マダム」の女性の合わせた重み(2.1)に対し、優位である。男性側の女性側に対する各章における特徴語の優位性が示差されている。

3.4 クロス集計マップ

次に、各章と登場人物の相互関連性のクロス集計マップを挙げる。横軸に各章の並びが挙げられ、縦軸には登場する人物がある。見方としては、「はしがき」では、語り手の「私」と写真を提供した「マダム」の二つの四角の面積が大きいですが、これは Jaccard 係数の数値がこの章において強いことを示している。そして写真の被写体としての「葉蔵」の四角があり、幼少期の写真の描写があることから、友人「竹一」の係数も見受けられる。

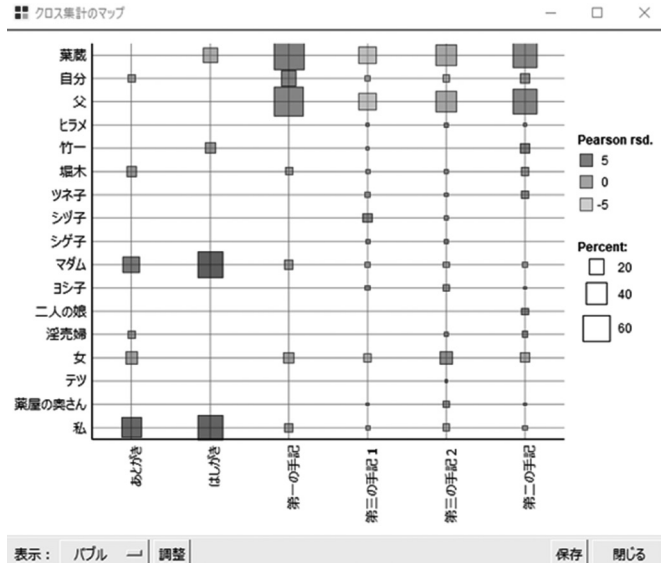


図4 人物と章のクロス集計マップ

このマップにおいて特徴的なのは、「第一の手記」「第二の手記」「第三の手記一」「第三の手記二」といった手記すべてにおいて、「葉蔵」「自分(葉蔵)」と「父」の二者に関する係数の数値が圧倒的に大きいことである。客観的な様相を帯びる語「葉蔵」と「父」の二者の関係の間を、主観的な様相を帯びる「自分(葉蔵)」を媒介にして、影響を及ぼし合っている。すなわち「父」と「葉蔵」の係数の大きさが、両者が共鳴し合っているかのように同程度である。

全手記を通して、葉蔵が交流する各女性たちの係数はさほど大きくはなく、分散していることが確認できる。

「第一の手記」では「父」は主人公の幼少期に場面登場はするが、他の手記では登場する場面はない。ただし、「父」の「代理人」として「ヒラメ」や「長兄」が「葉蔵」を監視し続けることで、「父」は精神的、威圧的に登場し続けるのである。

例えば、東京の学生時代の「第二の手記」において、「父」は経済的に、精神的に主人公に圧迫をかける。

父の議員の任期もそろそろ満期に近づき、いろいろ理由のあった事に違いありませんが、もうこれきり選挙に出る意志も無い様子で、それに、故郷に一棟、隠居所など建てたりして、東京に未練も無いらしく、たかが、高等学校の一生徒に過ぎない自分のために、邸宅と召使いを提供して置くのも、むだな事だとも考えたのか、(父の心もまた、

世間の人たちの気持ちと同様に、自分にはよくわかりません) とにかく、その家は、間もなく人手にわたり、自分は、本郷森川町の仙遊館という古い下宿の、薄暗い部屋に引越して、そうして、たちまち金に困りました。 (太字、下線は筆者による。)

3.5 対応分析

次に、空間的に各章を内容的な隣接関係で配置し、登場人物も各章での影響力の大きさ、すなわちその Jaccard 係数の大きさと関係の隣接関係で配置された「対応分析」を右に提示する。

ここでわかることは、「葉蔵」と「父」の係数が強さを示す円の面積が共に大きいこと、その両者の相互関係もほぼ重なるようにあること、そしてどの手記、「はしがき」「あとがき」とも離れていることが確認される。これは、どの手記にも万遍なく登場していること、どの章にも影

響を与えていることを表している。そして注目すべきは、「母」が「第一の手記」の辺りにひっそりと存在していることである。母親の主人公に対する影響力は「父」に比較すると圧倒的に少なく、「第一の手記」に限定されていることが了解される。

ここで、「あとがき」での「マダム」の最終部分の言葉を上げる。

「あのひとのお父さんが悪いのですよ」何気なさそうに、そう言った。「私たちの知っている葉ちゃんは、とても素直で、よく気がきいて、あれでお酒さえ飲まなければ、いいえ、飲んでも、………神様みたいないい子でした。」(下線、筆者)

以上のデータ分析により葉蔵の「人間失格」への道筋は、母親や男性の友人たち、交流する女性たちからの影響力よりも、より強く「父」の幼少からの継続的な影響力から生まれている点について、KH Coder による計量テキスト分析の三方法のデータ結果からも正当性があることが認められた。

まとめ

今回、太宰治の遺作とも言える『人間失格』(1948年)を素材に、KH Coder を利用した計量テキスト分析方法を応用し解釈した。

文学における計量テキスト分析の方法としては、第一にある作家の全作品のデータを入

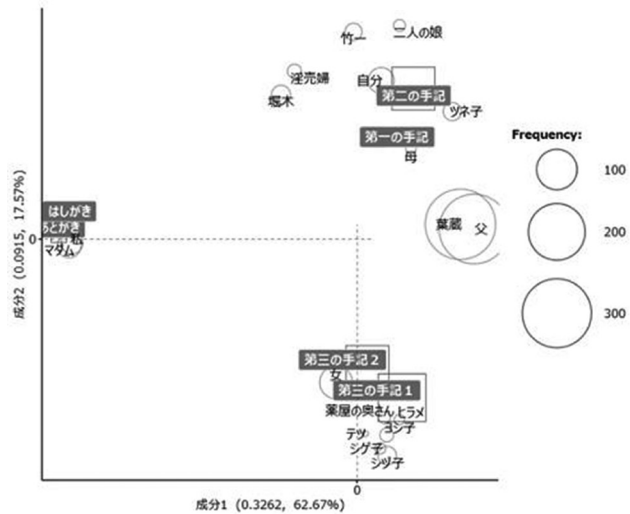


図5 章と登場人物間の相互関係を示す対応分析

力して、その作品群に潜む作家の傾向を抽出分析する方法がある。いわゆるビッグデータ解析の手法である。

他方、筆者は異なる第二の手法として、一つの作品に集中し、その中での語彙の選択と配置、登場人物の関係性を詳細に探る方法を選択した。この方法は、KH Coder の開発者である立命館大学の樋口耕一教授により、すでに夏目漱石の『こころ』の分析（下記引用文献 14）で試行されている。

今回の論考を書くに当たって、意図的にコンピューティングによる計量分析に比重を置いた。そして従来の伝統的な実証的方法と文献渉猟による文学研究に加えて、その方法が、テキスト分析をより実り多いものにする可能性があることを理解した。すなわち人目が隅々まで及ばない全テキストへの第三者的俯瞰という視点である。言い換えれば、定性的な情報分析に定量的分析の客観的視点を補填させることである。

今後は、今回試用した方法論をさらに深化させ、文学研究に新たな視点を加味していきたいと考える。

使用ソフト

KH Coder Ver. 3. Beta. 03i (<https://www.khcoder.net> よりダウンロード)

立命館大学産業社会学部樋口耕一教授が開発し、2001 年よりフリーソフトウェアとしてネット上に公開されている。

使用デジタル・テキスト

底本：人間失格 出版社：新潮文庫、新潮社

初版発行日：1952（昭和 27）年 10 月 30 日、1985（昭和 60）年 1 月 30 日 100 刷改版

入力に使用：1985（昭和 60）年 1 月 30 日 100 刷改版

校正に使用：1998（平成 10）年 3 月 5 日 136 刷

テキストファイル（ルビあり）：301_ruby_5915.zip

<https://www.aozora.gr.jp/cards/000035/card301.html>

注：

(1) 下記引用文献 15 において、大森は「あとがき」末尾のマダムという言葉「あのひとのお父さんが悪いのですよ」について、「父」の作中場面登場が少ないのにそのような一節があるのは、「これもかなり観念的な葉蔵の生涯を斯くあらしめる為には斯くあるべき〈父〉の観念が、本文中での叙述描写による肉化不十分のまま浮上してしまったもの、と（とでも）見るほかないであろう」（p. 11）とし、自身気の利かない結論としている。

(2) 下記引用文献 2(p. 212) において係数の計算式を、Jaccard 係数 $= \frac{n(X \wedge Y)}{n(X \vee Y)}$ としている。X と Y は、共に出現する（共起する）の 2 つの語を示す。

引用文献・参考文献

1. 樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析 第2版』ナカニシヤ出版, 2020年
2. 小林雄一郎『ことばのデータサイエンス』朝倉書店, 2020年
3. 末吉美喜『テキストマイニング入門』オーム社, 2020年
4. 金明哲『テキストアナリティクスの基礎と実践』テキストアナリティクス1, 岩波書店, 2021年
5. 金明哲・中村靖子編『文学と言語コーパスのマイニング』テキストアナリティクス7, 岩波書店, 2021年
6. 黒橋禎夫『改訂版 自然言語処理』NHK出版, 2020年
7. 伊藤公一朗『データ分析の力 因果関係に迫る思考法』光文社, 2017年
8. エレツ・エイデン, ジャン=バティ・ミシェル『カルチャロミクス 文化をビッグデータで計測する』阪本芳久訳, 草思社, 2019年
9. 江崎貴裕『分析者のためのデータ解釈学』ソシム, 2021年
10. アンソニー・ケイ『文章の計量』吉岡健一訳, 南雲堂, 1996年
11. 李在鎬編『文章を科学する』ひつじ書房, 2017年
12. 有馬明恵『内容分析の方法 第二版』ナカニシヤ出版, 2021年
13. 安藤宏『日本近代小説史』中央公論新社, 2019年
14. 高橋和子「コロナ渦における遠隔ダンス授業の成果と課題」『環境と経営』第27巻第1号, 静岡産業大学論集, 2021年
15. 樋口耕一「コンピュータ・コーディングの実践: 漱石「こころ」を用いたチュートリアル」『年報人間科学 24-2』pp. 193-214, 大阪大学人間科学部社会学・人間学・人類学研究室, 2003年
16. 大森郁之助「人間失格はなぜ《父の罪》か」『札幌大学女子短期大学部紀要』第8巻第1号, pp. 1-11, 1986年